

平成24年度第1回 函館市観光基本計画策定検討委員会 会議録

■ 開催概要

開催日時：平成24年10月4日（木） 15：30～17：30

開催場所：函館市企業局4階 大会議室

出席委員：市根井委員，蝦名委員，遠藤委員，奥平委員，折谷委員，木村委員，
國分委員，田中委員，全委員，西村委員

欠席委員：和泉委員，黒川委員，小林委員，中野委員，藤森委員

函館市：観光コンベンション部長，観光振興課長

(社)日本観光振興協会：全研究員，浅尾研究員

■ 次第

- 1 開 会
- 2 委嘱状交付
- 3 観光コンベンション部長挨拶
- 4 委員紹介
- 5 委員長選出
- 6 委員長挨拶
- 7 討 議
- 8 そ の 他
- 9 閉 会

■ 委嘱状交付

観光コンベンション部長より出席委員へ委嘱状を交付。

■ 観光コンベンション部長挨拶

本日はお忙しい中お集まりいただき感謝申し上げます。

私自身，観光基本計画の策定業務にこういう形で携わるのは今回で2度目となる。

次期観光基本計画は平成26年度からのスタートとなるが，3年後には新幹線の開業といった函館観光にとってこれまでにないような一大転機が控えており，大変心引き締まる思いである。

各委員の皆様には，お忙しいところ色々とお苦勞をおかけすることとなるが，策定までの1年半の間よろしくお願いしたい。

■ 委員紹介

事務局より出席委員を紹介し，各々から挨拶。

■ 委員長選出

事務局より、委員長の選出案を提案することについて諮り、異議なく了承。

これに基づき事務局より、公立はこだて未来大学 木村 健一委員を委員長とする提案がなされ、出席委員に諮ったところ、異議なく了承。

■ 委員長挨拶

(木村委員長)

現在の観光基本計画の策定にあたって、当時私も委員として参加していた経験がある。

観光アドバイザー会議の座長という立場で、先般、委員の皆様のご協力のもと、現計画の中間報告をとりまとめたところだが、その成果について、今度はこの策定検討委員会の委員長として考えていかなければならない。

現計画を立てる際に設定した数値目標の達成を目指し、市民、行政、産業はかなりの努力をされてきたと思うが、その間、大災害や外交問題、政治の変化等があり、大きく方針を変えざるを得ない状況もあった。

まだまだ変革期が続く中での計画立案となるが、そのような変化に耐えうるような計画を作ることが目標である一方で、アドバイザー会議のように常に内容を精査しながら、全体像を操作していくことも必要になってくる。

現計画策定当時は「数値目標」が重視されていたが、様々な状況を踏まえ、中間報告の取りまとめの際には「選択と集中」ということを意識して議論してきた。さらに、「サステナビリティ（持続可能性）」という点で、量的目標以外にも質的目標が重視されるような状況になってきている。今回の策定にあたっては、これら3つのキーワードを意識しながら取り組みを進めていきたい。

時間のかかる会議となるが、函館の主要産業である観光計画の策定ということで、ぜひとも委員の皆様のご協力をお願いしたい。

■ 説 明

配付資料に基づき事務局より説明。

続いて、基礎調査業務の受託者である（社）日本観光振興協会より函館市観光基本計画策定調査（案）に関するプレゼンを実施。

■ 討 議

(木村委員長)

函館市観光基本計画策定調査（案）について、この後、まだ半年ほど調査期間があるので現時点では案という形になっているが、今日は各委員からご意見を頂戴したい。

まず、私から率直な感想を申し上げますと、類似都市の根拠が分からずあまり参考にならないのではないかという思いがある。今後の作業に大きく関係してくるので、どのように考えているのかを最初にお聞きしたい。

平成27年度に北海道新幹線の開業を迎えるにあたり、この計画自体が試されることになる。港町かつ鉄道網との関係で類似都市を再選定するなど、説得性がないと類似都市として議論するのが難しいのではないかと。

類似であることの要素を客観的に明示していただけると今後の議論がしやすくなる。

(日本観光振興協会)

港町として、昔からある観光地はどこかという視点で全国を俯瞰し、代表的な都市として小樽市や神戸市などを挙げた。

港町と鉄道網の二つの条件で類似するところは残念ながら見当たらなかったが、新幹線開業に関しては、八戸市と鹿児島市を挙げさせていただいた。

(田中委員)

ローカルな都市を比較するには、大標本と比較すべき。日本全体の観光動向の中で、函館観光が勝負に勝っているかどうか。そういう観点が必要。一つ一つの都市には特殊性があって比較が難しい。

それから、質的評価と量的評価を区別して考えないほうがいい。量的なものは質的なものでカバー可能である。質と量、それぞれが持つ色々な要素を積算して総合的にバロメーターとして出せるような指標があればいい。

本来なら国がその指標を作り、各都市との比較ができるようになればいいのだが、今回独自に「函館観光パワー係数」のようなものを検討してもいいと思う。

今回の報告案にも、それに役立つようなデータがいくつか見受けられる。例えば、函館に来た回数と人数を掛け合わせて数値を算出すると、それは一つの魅力係数となる。また、函館のみを訪れた人の割合が高いこと。これも函館の魅力の高さを表しており、データとしては価値が高い。

この考え方は、国連の「人間開発指数」に着想がある。函館に観光に来てどれだけリフレッシュできたか、幸せな気分になって帰って行ったか。「観光開発指数」のような考え方になるのかもしれない。

(木村委員長)

数値の解釈についてはこれからの課題だが、これだけ面白いデータが揃い始めているので、これらを生かして議論していきたい。

(西村委員)

今後10年を考えていくうえで、国内向け、海外向けの計画をしっかりと区別して考えていかなければならない。ただ、共通して取り組むべきものもあるので、これら3つの観点で考えていくべきだ。

海外については、今もそうだが、今後伸びていく可能性が高いという認識を持って取り組んでいくべき。

国内については減少傾向にあるが、海外に目を向けながら、質的な国内旅行の充実についても考えていかなければならない。

(全委員)

同じく、国内と海外では取り組み方が違ってくると思う。

韓国との関係で言えば、2006年に直行便が就航して以来、相互の交流が増えてきているが、6年が経過した現在、旅行形態が団体・ツアー型から個人型に変わってきている。

インバウンドについては、個人旅行に対してどのようなものを提供できるのかが重要。8月に韓国から来た旅行者の話だが、港まつりでイカ踊りに参加してみて初めて日本の夏祭りの文化を体験することができたと感じ、非常に良い印象を持って帰られた。夏には日本全国で色々な夏祭りが開催されているが、韓国では全国各地でそのようなイベントが開催されることはない。そのためインパクトが大きかったのだと思う。そういう意味で、日本の文化的なイベントと一緒に参加できるようなものがあるのもいいと思う。

バル街では非常に多くの市民が集まっているが、そのような市民参加型のイベントに海外の個人客を取り入れるようなことを積極的に考案していくことも必要だ。

(國分委員)

データを分析していけばわかってくることかもしれないが、現状どうなっているのか、課題は何なのかが具体的に見えてこない。

函館市が既に満足度の高さと再来訪希望がこれだけ高い割合なのであれば、現状のままでもいいのではないかと、ということになってしまうが、実際は違うはず。これらの数値では見えてこない深い部分をミクロな視点で分析することが必要で、地域の中に隠されている色々な問題に目を向けなければ形だけの計画で終わってしまいかねない。

(折谷委員)

基礎となる函館市内での調査はどのくらいの頻度で実施しているのか。

また、不満や心残りだった点などについて、数は少ないかもしれないが、実際に函館へ来た観光客の生の声として少しでも多く取り上げることが今後の議論の中で大事になってくると思う。

(事務局)

函館市では毎年観光アンケート調査を行っており、調査は4月から翌年3月まで通年で実施している。平成16年以降の調査結果を今回の基礎調査資料の参考として日本観光振興協会に提供している。

(奥平委員)

パーセンテージで示されているデータがあるが、母数の大きさに意味合いが変わってくるので、そのあたりを意識した議論が必要。

交通の点では新幹線にばかり目が行ってしまいがちだが、LCCの存在を忘れてはならない。就航によりどのような観光効果があるのか。茨城空港や福島空港ではすでの結果が出てきていると思うので、そうしたデータも調査に取り入れながら函館の進むべき方向性を探っていければと考えている。

また、函館空港はステイ空港ではないため、時間の制約が非常に大きい。観光都市として、ステイのない空港は非常に不利であるということを念頭において議論していくべき。ステイがある空港とない空港で比較することもできるはず。

もう一点はフェリーの活用。特に夏場の津軽海峡の景色は、おそらく世界屈指の美しさだと思う。船を使った観光振興について事例があれば、類似都市を再選定する際のヒントにもなるのではないだろうか。

(木村委員長)

確かに、長崎などは遊覧船が有効に使われていて非常に面白い展開をしている。

(遠藤委員)

類似都市のデータを見ると、日帰り客の割合が高くなっているが、函館市のように宿泊客の割合の方が高いところも類似都市として挙げられるはず。同じように新幹線の開通を控えている金沢などは、比較対象として参考になるかもしれない。

北海道へのアクセスの部分で、奥平委員の話にもあったようにLCCの存在に触れられていない。国内には現在3社のLCCが存在している。ここ1、2年で旅行形態が変わってきている中、果たして東京から新幹線で3万円～4万円もかけてやってくるのかどうか。LCCの比率が今後どれくらい伸びてくるのか、しっかり分析していかなければ5年、10年の計画を策定するのは難しい。

また、旅行手配の方法に関する設問があるが、旅行商品の販売方法や取扱いが大きく変わってきているので、設問内容については整理する必要があると思う。

(蝦名委員)

ツアーが減ってきているというデータについて、個人的にも確かにこれまでツアー旅

行を経験したことが一度もない。ツアー旅行では、添乗員からその場で旅行先の情報を得られるという大きなメリットがあるが、個人旅行の場合は、そうした情報をどこで仕入れているのか、あるいはそれに変わる魅力的な楽しみ方を持って来ているのか、その点が気になった。

函館の印象に関する設問についてだが、もし自分が旅先でこのようなアンケートに協力する場合、わざわざ訪れた観光地で「良くなかった」という評価はなかなかしないと思う。他の観光都市でも同じような調査をしていると思うが、「とても良い」の割合はどうしても高く出るのではないか。

(市根井委員)

やはり国内客と海外客への対応の仕方は全く違ってくると思う。

国内客に関して言えば、旭山動物園の成功が頭に浮かんだ。札幌から車で1時間半もかかる旭川に、これほど多くの人が集まる要因は何なのか。プロの目でこの成功例を分析すれば、旭川よりもアクセスの面で有利な函館において今後の参考になると思う。

夜景やグルメ、歴史的建造物など、函館を旅行先に選んだ理由で割合の高かったものを一つのパックとして打ち出し、宣伝、広告していけば旭山動物園にも負けないぐらいの集客力が期待できる。

海外客についてだが、データを見ると日本に来る外国人の数がものすごい勢いで伸びてきている。函館にも、非常に多くの外国人観光客が訪れている。

函館善意通訳会は3年前に全国の善意通訳会組織に加入したが、インターネットに掲載されて以来、多くの問い合わせをいただいている。

今年開かれた世界料理学会やこれから開催される国際電気学会など、外国人の方はどんどん函館を訪れている。H I F（北海道国際交流センター）で長年やっている夏季日本語セミナーに参加する外国人の方などは、リピーターになってもらえる、宣伝してもらえる大事なお客様だと思っている。

さらに、函館には外国の豪華客船も入ってくる。乗船している外国人の方に函館はいいところだと感じてもらえれば、自国に帰ったときに必ず周囲の人達にその魅力を伝えてくれる。

善意通訳会としては、専門的な知識を要するガイドを要求されることもあり組織として対応できないこともあるなど、外国人観光客の受け入れについてはまだまだ課題がある。調査案の中に、観光ガイドの人材養成の継続的取り組みが課題という記載があるが、まさにその通りだと思う。

(田中委員)

國分委員が仰っていた、もっとミクロな深い部分に課題があり、それが数量データの中に埋没しているという問題については、ネガティブ調査の実施が有効だと思う。ポジ

タイプなデータには、解決すべき課題がどこにあるのか端的にわからないという問題がある。

(木村委員長)

今回の調査案で示された各データはこれからの議論の参考になると思うが、使い方についてはもう少し考えないといけないと感じている。各委員からの意見を一言で言うと、この地域の伸びしろはどこにあるのか、どこを伸ばすべきなのか、数値でも計りたいし、質的な問題としても議論したいということに集約されると思う。それについては国内外別々に議論しなくてはならないが、その観点がもう少し明快になるよう、今後の調査では数値の扱いに工夫をしていただきたい。そのうえで各委員からの要望についても、この後の調査にぜひ生かしてほしい。

各委員からも色々と意見が出ていたが、全体的な議論と同時にやはりマイクロな部分の積み上げも必要。例えばお祭りやバル街など、質的な部分も含めてどのくらい伸びしろがあるのか、といった議論も今後していければと考えている。

本日の委員会についてはこれで終了いたします。

ありがとうございました。

■ 閉 会